



昭和47年の設立以来、知的障害者を中心とした施設利用者が20種類以上の農産物の生産、養豚等の畜産から解体・食肉加工、直売所(兼)レストランの接客に至る様々な作業に従事し、安定した高賃金を実現。

基本情報

- 所在地：鹿児島県南大隅町
- 団体名：社会福祉法人白鳩会 花の木農場
- 選定表彰：
 - ・ H27 ディスカバー農山漁村の宝 第2回 全国選定 (主催：農林水産省)
 - ・ H29 南日本文化賞 (主催：南日本新聞社)
 - ・ H29 瑞宝双光章 (中村隆重) (秋の勲章)
 - ・ ノウフク・アワード2020 グランプリ
 - ・ G A P 実践大賞 2022(一財)日本GAP協会 etc.
- 主力商品：茶、にんにく等20種類以上の生鮮野菜、精肉・食肉加工品、総菜、パン etc.
- 取得認証等：ノウフクJAS、有機JAS、ASIAGAP

取組の概要

- 20種類以上の農産物を生産し、障害者等の通年作業を確保。また、繁殖牛や養豚の畜産も行い、解体精肉、食肉加工品は併設した直売所(兼)レストランで販売・提供。
- 法人内約180名のうち、農作業に従事する利用者は86名(R5)。茶の乗用摘採機や管理機等の操作技術を持った障害者も多数存在。
- 矯正施設出所者及び少年院出院者も在籍し、過去の受入や退所者を含めると30名以上の受入実績。近年は法務省及び矯正施設等とともに矯正と農業・福祉が抱える課題(ギャップ)の解消のために連携を強化。



茶の収穫、機械操縦を重度障害者が実施

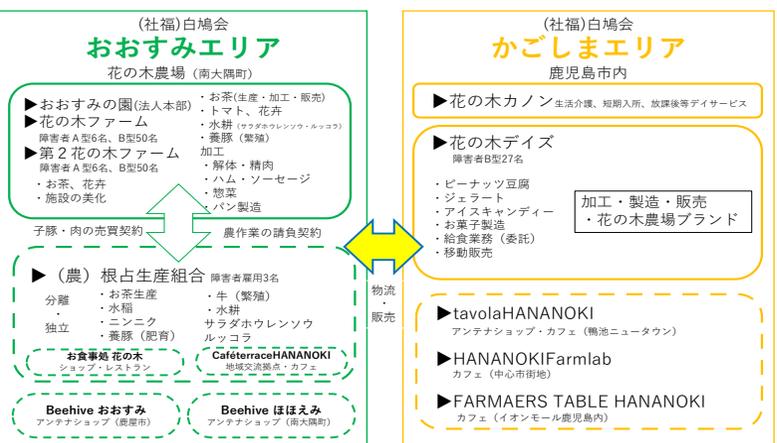


にんにく皮むき作業の様子



加工場での作業

体制図



取組の成果

- 利用者にはA型平均10.5万円/月、B型平均2.0万円/月と県内平均を上回る賃金を実現 (R5)。
- 地域の農地を引き受け38haにまで拡大。うち11.9haは荒廃農地を再生し地域農業の維持にも貢献。
- 茶事業では有機JASやASIAGAPの認証も取得し、障害者とともに持続可能な農業にも挑戦。農場内に開設した直売所兼レストランは地域住民と障害者の交流拠点機能も担っている。

所在地 ▶ 鹿児島県肝属郡南大隅町根占川北9466-8
 連絡先 ▶ TEL : 0994-27-4737 E-mail : jusan@hananokifarm.jp
 ウェブサイト ▶ <http://shirahatokai.jp>

【取組のプロセス】

養蚕業の衰退（山林・桑畑を手放す所有者も）
地域活力の低下

昭和47年

きっかけ

障害者が活動をするための場所として農場をつくりたいという漠然としたコンセプトがあったなか、養蚕業が斜陽になった時期に山林（桑畑）を手放す話を聞いたことから購入を決意

昭和48年

おおすみの園開所、農場設立へ

- 昭和47年、当時地場産業が第一次産業しかない地域ということもあり、野菜を作り、豚を育てることが目の前の仕事。障害者へ就労の場を提供するために農場運営を開始。
- 昭和53年 農業を本格化させるために農事組合法人根占生産組合を関連組織として別途設立。農産物を生産拡大。
- 昭和56年 大隅授産センター（現・花の木ファーム）を開所。
- 平成10年からアンテナショップBeehiveを大隅エリア、鹿児島エリアで展開。



にんにくのほ場準備

農業生産面の強化

平成12年

6次産業化への取組、交流拠点機能の強化など事業の展開期へ

- 平成16年にレストラン花の木、平成17年に花の木大豆工房を開所。食品加工等の分野でも障害者の働く場の提供を開始するとともに住民と障害者の交流拠点としても機能。
- 近年は、ジェラート店、ホットドック店、カフェテリア等を県内大型店舗内などに続々とオープンしており、障害者のみならず健常者の雇用場の提供しており、地域へ貢献。



母豚の出産介助作業

高齢化により地域農業者が減少。
障害者が地域農業を支える労働力として期待される。

平成27年

持続可能な農業にも挑戦

- 平成29年には有機JAS、令和元年度にはASIAGAP、令和5年にはノウフクJASを取得。
- 令和5年現在では、福祉サービスの利用者は約230名となり、様々な形で賃金・工賃を得て働く利用者は102名に。



茶園の管理作業

農山漁村振興交付金福祉農園等支援事業の活用（H29～30）

今後の展望

発達上の課題を持つ触法者の受入に向けて法務省との連携

- 花の木農場では法務省の関連施設との連携を強化し、矯正と農業・福祉の双方が抱える課題（ギャップ）を解消していく方法を議論し、対象少年の処遇に関するケース会議を重ね、相互交流や矯正展の出店などを通じて、持続的に法務省との関係性を築いている。
- 実際に中津少年学院を出院した少年を受け入れるなど具体的な形となるケースも出てきており、今後お互いの連携はますます進むと考えられる。



田植え後の補植作業



障害者等の“症状の再燃予防をしながら、苦労や喜びの経験を奪わないようなサポートをする”ことをモットーに就労支援施設を創設。施設利用者目線の就労環境改善と地域農家との連携を通じて、地域農業の維持・荒廃農地発生防止及び就労先の拡大、工賃向上に取り組む。

基本情報

- 所在地：鹿児島県龍郷町
- 団体名：株式会社リーフエッジ
- 選定表彰：
 - ノウフク・アワード2021優秀賞
 - ディスカバー農山漁村の宝2022九州地区
 - ESSEふるさとグランプリ2023金賞
- 主力商品：
 - ジェラート、ハーブティー、精油 等
- 取得認証等：-

取組の概要

- 近隣農家手伝い（マンゴー、たんかんなど）や自家栽培ハーブをジェラートやハーブティーに加工し、敷地内ジェラテリア等で販売。食品加工残渣や余剰作物を蒸留することで精油や芳香蒸留水の生産も実施しており、工賃向上や職業選択の拡大に結び付けている。
- 近隣農家に施設外就労で手伝いに行くだけでなく、農家の手が空く時期には農家をアルバイトとして雇用するなど、相互の関係を強めている。



たんかん収穫作業



ハーブを活かしたドリンク

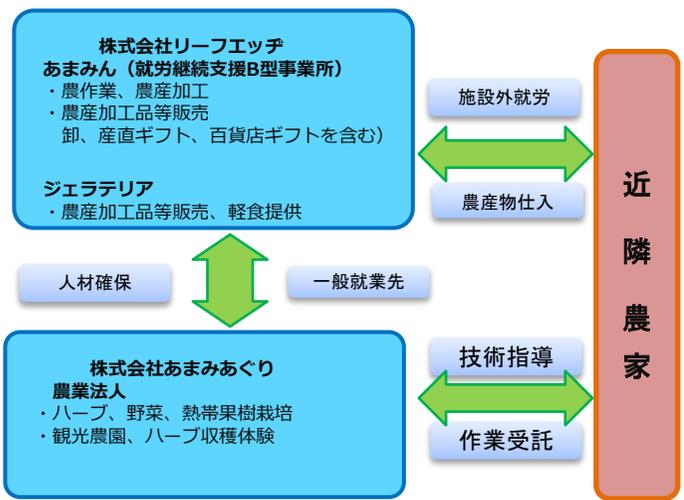


カップジェラート（17種）



ECサイト

体制図



取組の成果

- 利用者の興味や障害特性に合わせた仕事のマッチング重視により、作業環境の改善や作業効率の向上につながり、利用者が増加。

	平成29年	令和4年
施設利用者	5名	34名 (6.8倍)
ジェラート等販売 (ジェラートは令和元年開始)	120万円	2300万円 (19.1倍)

- 食品加工（ジェラート、ハーブティー等）とECサイト構築により販売が増加し、工賃が向上。

所在地 ▶ 鹿児島県大島郡龍郷町大勝578
 連絡先 ▶ TEL:0997(62)5260 E-mail:reefedge.amami@gmail.com
 ウェブサイト ▶ <https://reefedge.co.jp/>

【取組のプロセス】

平成28年

近隣農家の手伝い開始

きっかけ

「雨の日も仕事がある」ことに魅力を感じ、平成28年の就労継続支援B型事業所開設と同時に、農福連携の取組を開始

平成29年

ハーブティー用のハーブ栽培開始

農作業の労働対価は、農作物で！Win-winの関係を構築

- 「奄美の農業は台風との闘い。なかなか儲からない。」との声を聞き、労働対価は農家の金銭的負担が少ない「農作物」で受け取り、対価にはB級品も含めることで通常よりも多めにいただき、付加価値の高い加工農産物の製造を行うことで工賃支払いに繋げる。



令和元年

ジェラート製造棟の建設

利用者の興味や障害特性に合わせた仕事のマッチング

- 精神障害者を中心に5～16名が農作業を実施し、室内作業希望の利用者が食品加工に取り組みとともに、対人恐怖の方は在宅就労にてECサイトの作成管理、筋ジストロフィーの方や脳卒中罹病後遺症の方はジェラートパッケージのデザイン作成を実施するなど、利用者の特性に合わせて作業の割振りを実施。
- 農作業は、作業強度別のグループを編成し、ハードになりすぎず物足りなくない作業量に調整するなど工夫。



令和3年

一般就労への円滑な移行へ

施設利用者の快適な作業環境と一般就労の場の提供

- 体調が安定した利用者の一般就労への円滑な移行に向け、ハーブと熱帯果樹の生産をメインとする農業法人(株)あまみあぐりを設立。
- 仕事の選択肢を増やすため、ジェラート販売の直営店として「ジェラテリア」を建設。2階は休憩室とし、短時間しか就労困難な利用者の出勤率向上を図る。
- 食品加工残渣や余剰作物を有効活用するために蒸留器を導入、精油と芳香蒸留水の製造開始。さらに残った残渣は畑に返し、島内循環型農業に取り組む。



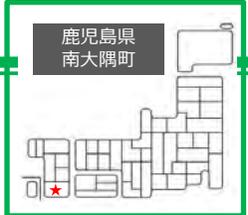
今後の展望

誰も置いていかない施設へ

農福連携を観光や自然環境保全に活かし、持続可能な地域づくりに

- 増え続ける荒廃農地を活用し、障害者と共に新たな地域特産品づくりを目指す。
- 今後の人口減少下でも持続可能な地域づくりを目指し、農福連携を他産業とつなげていく。
- スタッフや利用者などみんなが潤い、心地よく過ごせるやさしい企業となる。





農福連携により地域課題を解消するため、大隅地域で農福連携を実践している団体を結びつけるプラットフォームとして令和3年に設立し、活動を開始。現在では農福連携実践団体だけではなく企業、JA、畜産、林業など40団体が加入。

基本情報

- 所在地：鹿児島県南大隅町
- 団体名：大隅半島ノウフクコンソーシアム
- 選定表彰：－
- 主力商品：－
- 取得認証等：－



フードロス対策& 農福連携「小さいプロジェクト」

取組の概要

- 会員事業所及び支援機関、行政、アドバイザーと連携を図りながら、各種研修会や先進事例調査のほか、コンソーシアム内での共同栽培や、お試しノウフク、マッチング活動等を実施。
- ノウフクJAS取得に向けた研修会の開催など、農産物の付加価値向上・販売力強化に向けた取組も実施。
- 令和5年度は上記の活動のほか、農家向けの研修会の開催や、観光庁の補助事業を活用したインバウンド事業を行い、「農福連携×観光」の視点からも活動を展開。



インバウンドモニターツアー

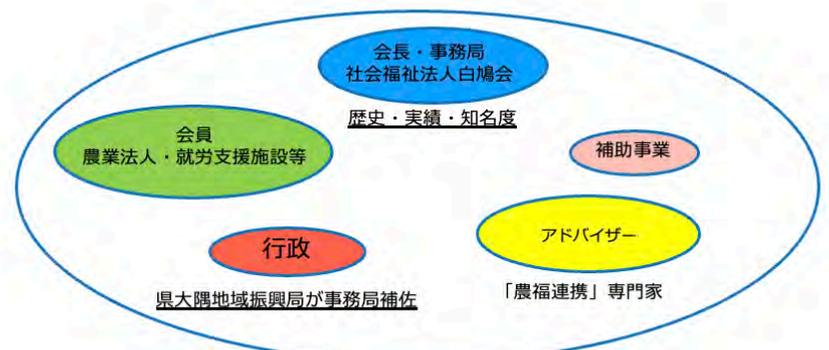


ノウフクJAS研修会



じゃがいもノウフク【過疎地援農】

体制図



取組の成果

- お試しノウフクや共同農場の試験的な運営により、担い手不足の過疎地への援農、農福連携による就労の機会を創出するとともに、障害者だけではなく生活困窮者等にも農業をはじめのきっかけづくりを提供。
- 会員間で新たに施設外就労契約が結ばれたり、会員同士のビジネスも生まれ、地域の農林水産業の維持・発展が図られている。
- 令和5年度現在、会員である2団体がノウフクJAS認証を取得。
- 廃棄されている「小さいも」をコンソーシアム全体で収穫し販売するフードロス対策を実施することにより、福祉事業所の選択肢が増え、小さいもを使った販路拡大、子ども食堂などにも活用されるなど、多様な繋がりを創出。
- 様々な活動によりコンソーシアムの存在が地域に認知され、設立当初15団体だった会員が現在40団体に増加。

所在地 ▶ 鹿児島県肝属郡錦江町神川-3306-4 2階図書室 (事務局)
 連絡先 ▶ TEL:080-5257-3091 E-mail:nouhuku.tagayasu@gmail.com
 ウェブサイト ▶ <https://onc2021.com/>

【取組のプロセス】

事業所の利用者や担当者の高齢化、地域の働き手の減少、急激な荒廃農地の増加、地域活力の低下

～令和2年

プラットフォーム（コンソーシアム）設立提案

令和2年10月

ポストコロナ農業生産体制革新プログラム事業の活用

令和3年5月

中山間地農業ルネッサンス推進事業の活用（令和4年）

令和4年

令和5年

今後の展望

きっかけ

令和2年10月、鹿児島県大隅地域振興局担当者と福祉施設職員から、「大隅半島農福連携プラットフォーム設立構想」が提案され、賛同した現コンソーシアムの役員はじめ関係機関が連携し、課題共有を開始

農福連携の実践者同士のつながりを創出したい

- 大隅地域で農福連携に取り組んでいる事業所等は、それぞれの事業所の取組は既知であったものの、点的な取組が多く、各事業所が抱える課題などを共有する状況にはなかった。
- それぞれの事業所が抱える課題や将来に対する考え方は、農福連携の枠組みに止まらず、地域をどのように振興していくかという広範なものであった。
- （社福）白鳩会がノウフク・アワード2020でグランプリ獲得し大隅半島に注目が集まる。



行政・JA・地元農家との打合せ

広範な地域課題解決のための多様な連携を

- 「大隅半島農福連携プラットフォーム設立構想」に賛同する仲間づくりとコンソーシアム設立に向けた県の補助事業申請書類の作成を開始。農業サイド、福祉サイド双方が持つ人的ネットワークを最大限活用し、15事業所が参画（現在は農業法人9社、林業1社、畜産1社、福祉事業所11法人、農業・福祉どちらも運営2団体、企業4社、2団体、10地方公共団体の計40団体及びアドバイザー5名で運営。）。



令和3年5月設立総会後の記念撮影

大隅半島ノウフクコンソーシアムを設立、本格活動開始

- 令和3年5月に設立総会を開催し、その後、役員会の定期開催、優良事例共有会、大隅半島における課題共有ワークショップ、ノウフクJAS研修会、経営に活かすGAP研修会、ブランディング・マーケティング研修会、先進事例調査、お試しノウフク、請負作業時の標準工賃策定検討等を行う。
- 令和4年度は、引き続き ①農福連携に関する研修・先進事例調査研修、②ノウフクJAS取得支援及びノウフク製品のブランディング、③農福連携新規取組の掘り起こし・マッチング・取組支援、④会員事業所による共同栽培農場の運営、⑤地域における請負作業標準工賃の策定を重点取組事項として取り組む。
- 令和5年度は例年の活動を続けながら農家向けの研修会や観光庁の補助事業を活用したインバウンド事業をおこない、「農福連携×観光」の視点からも活動を展開。



令和4年度も活動スタート

～誰一人取り残さない大隅半島の課題解決プラットフォームに！～

- 大隅半島の農福連携推進はもちろん、会員各社の課題解決を図る一方、新たに農福連携に取り組みたい事業者へのサポート等をおこなうことで、大隅半島の農業振興にも寄与していく。
- 大隅半島の課題は農業と福祉以外にも多く存在する。これらの地域課題の中にも、農福連携を基軸にすることによって解決できる可能性が広がる。



実践を学ぶ関西方面への視察研修



小さいプロジェクトのフライヤー



食品加工会社として農業に取り組む中で、人材確保が困難であったことや、地域に働く意欲のある障害者が多いことを知り、自社の課題解決と障害者の労働の場を確保するため、就労支援事業所を開設し農福連携に取り組む。

基本情報

- 所在地：鹿児島県南さつま市
- 団体名：株式会社南風ベジファーム
- 選定表彰：
 - ・ H29「ディスカバー農山漁村」九州農政局選定（主催：九州農政局）
 - ・ H30 そうしんビジネスイノベーション大賞（主催：鹿児島相互信用金庫）
 - ・ 令和元年「ディスカバー農山漁村」第6回全国選定（主催：農林水産省）
 - ・ R3「かごしま・人・まち・デザイン賞」（主催：鹿児島県）
 - ・ R3「第16回南日本経済賞」（主催：南日本新聞社）
- 主力商品：赤しそ・高菜・梅・だいこん・らっきょう・にんにく・ハーブ
- 取得認証等：認定農業者、6次化事業者

取組の概要

- 約6haの農地で赤しそ、高菜、じゃがいも、だいこん等を生産。生産した農産物は、自社で惣菜等に加工・販売。高菜の一部は、外部の漬物業者へも販売。
- さつまいもの苗植え作業は、機械化が難しく人手を要するため、人手の確保が困難になった近隣農業者から、約10ha分を請け負い、障害者等の15名が作業。
- 自社で生産する高菜は、収穫作業の機械化が難しく、人手を要するが、収穫以外の作業は機械化が可能なため、さつまいもの苗植えを請け負っている近隣農業者に約5ha分の収穫以外の作業を依頼。



かんしよの苗植え作業

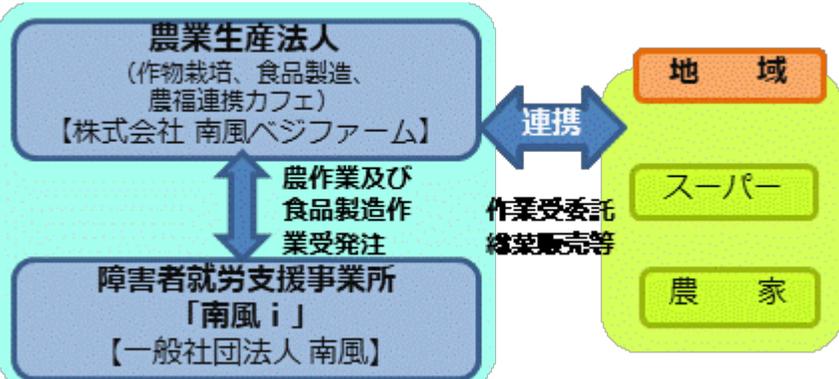


赤しその栽培風景



白菜の加工作業

体制図



取組の成果

- 漬物等の加工技術を有し、販路が確保されていることもあり、着実に野菜生産、加工事業の規模拡大が図られ、利用者数が増加。

平成29年 農作業等に係わる利用者数 21名

令和4年 45名

- 人手を要する芋苗植付け作業や、高菜の収穫作業を近隣農家から請け負い、機械化が可能な作業を近隣農家に依頼する相互の協力体制を構築。

所在地 ▶ 鹿児島県南さつま市金峰町高橋3075-35
 連絡先 ▶ TEL:0993-77-3932 E-mail: contact@nanpuu-vege.com
 ウェブサイト ▶ <http://www.nanpuu-vege.com/>

平成25年

・原料農産物を作る農家が高齢化等により減少。
・安定経営のためには自社生産が必要。

きっかけ

農業法人の事業拡大の課題であった「人手不足」解決のため、就労継続支援事業所を開設し、農作業等を中心に通年就労（施設外就労）の場を提供

農業生産法人株式会社南風ベジファーム設立

- 食品加工の会社を営んでいたが、原料となる農産物を作る農家が高齢化等により減少することを危惧。
- 自社農地で農産物生産を行うことで、6次産業化の取組をスタート。

就労継続支援事業所「南風i」を開設

- 農業部門、加工部門とも規模拡大を検討したが、人材確保が困難であった。
- 一方、地域には働く意欲のある障害者が多いことを知り、課題解決と障害者の労働意欲を繋ぐ就労支援事業所を社屋内に開設（H27年利用者：A型14名、B型4名）。

平成27年

・業務を拡大したくても人手不足がネック。
・求人を出しても応募者は来ない。

第2加工場等を整備し、自社栽培野菜を使った総菜製造にも着手

- 地元スーパーの「総菜コーナーに納品する会社が県内に無い。」という声に応え、自社栽培野菜を用いた惣菜製造にも着手。
- 総菜販売が加わり農産物販売等も含め、売り上げが約53百万円（H29）⇒約182百万円（H30）に増加。

平成30年

・他の人がやりたがらないけど、誰かが『欲しい』と思っていることを行う！

農福連携カフェ「agricafe nanpoo」開設、福祉部門を一般社団法人化

- 会社のイメージを明確化するために農福連携カフェをオープン。
- カフェにはショップも併設し、地域製品の販売により、地域農業等との連携強化。
- 福祉部門を分社化、一般社団法人南風を設立し、障害者福祉サービス部門を強化。

令和2年

・「南風ベジファームって、何の会社なの？」の問いかけに見える形で答えるための取組を実施

地域とともに成長する会社を目指し、障害者とともに挑戦！

- コロナ禍で来店者が減少した農福連携カフェを“with コロナ下”での“食の提供拠点”としてテイクアウト中心の形態に改装。
- 加えて、経営基盤強化のため農産物加工場を増設し、スーパー向け総菜提供強化と就労機会の確保を実施。
- 地域では、各業種で人手不足が続く中、障害者は仕事を探しており、今後も「会社も障害者も地域もWin-Winの関係を築く。」をモットーに、農福連携を基軸に事業展開を図る。

今後の展望

